

第5回 大学生・若手技術者のためのキャリアアップワークショップ

副島 達矢

横浜国立大学 IEEE SB,

1. はじめに

2011年6月25日に慶応義塾大学(日吉キャンパス)にて、「第5回 学生・若手技術者のためのキャリアアップワークショップ」が開催された。これは、IEEE Tokyo GOLD Affinity Group, IEEE Japan Council Women in Engineering Affinity Group によって企画され、東京電機大学Student Branch, 慶應義塾大学Student Branch, 東京理科大学Student Branch, 横浜国立大学Student Branch, 明治大学Student Branch, 早稲田大学Student Branchとの共催によって催されたものである。

2. ワークショップの概要

2.1. ワークショップの目的

本ワークショップでは、学部生・修士課程・博士課程の若手研究者を対象とし、自己の進路やスキルに対する意識改革を促すことを目的とした。「日本人が海外で活躍するには?」、「楽しく働くことのできる仕事とは」などのテーマについてワークショップ形式で議論する機会を設け、参加者がこれから社会で活躍する準備を行うのに役立つためのものである。

2.2. ワークショップの内容

本ワークショップを進行するファシリテータとして、産業界や研究・教育機関で活躍中の若手研究者・技術者を7名お招きした。各ファシリテータを中心としたA~Gの7グループに

参加者を分け、各グループではファシリテータが設定したテーマに関する議論を行った。ファシリテータの主な役割は、自身の経験やスキルアップについて振り返りながら議論の進行を行うことである。また、各グループにファシリテータのサポート係を配置し、活発な議論を促すとともに進行の記録をとる役割を依頼した。

2.3. プログラム

本ワークショップのプログラムは、下記の通りである。

司会：大越康晴 (IEEE Tokyo Gold Chair, 東京電機大学)

13:00~13:30 受付

13:30~13:35 開会挨拶：大越康晴(同上)

13:35~14:00 ファシリテータの紹介

14:00~14:05 休憩

14:05~15:35 各テーマに分かれてディスカッション

15:35~15:45 グループ内でまとめ

15:45~16:00 休憩

16:00~16:40 各グループの結果のまとめの発表

16:40~16:50 閉会挨拶：青山友紀

(IEEE Tokyo Section Chair 慶応大学)

17:00~19:00 懇親会

開会挨拶 笹瀬巖先生 (慶応大学SB Counselor)

司会：菊田洸 (慶応大SB Chair)

グループ	氏名	所属	テーマ
A	Alex Fung	日本 IBM 株式会社 東京基礎研究所	母国以外の就職について
B	加藤祐子	株式会社日立製作所	楽しく働くことのできる仕事とは?
C	近藤宏行	ボッシュ株式会社	転職はしたほうがいい?しないほうがいい?するとしたら何年後?どんな会社に?
D	鈴木建之	外資系コンサルティング会社勤務	会社でしたいこと, できること, 会社に求められること
E	森山絵美	株式会社 NTT データ	システムエンジニアに必要なこと
F	山下真司	株式会社富士通研究所	日本人が海外で活躍するには?
G	若木裕美	株式会社東芝	学生時代の研究活動と就職後の研究活動の違い

報告

3. 当日の様子

当日のワークショップ参加者は、関係者も含め62名であった。その人数構成は学生45名（IEEE学生会員16名、非会員29名）、一般10名（IEEE一般会員10名）、ファシリテータ7名（IEEE一般会員5名、非会員2名）であった。グループごとの議論の流れやまとめを以下に記す。

3.1. グループA

グループAでは「母国以外の就職について」というテーマでIBMよりアレックス氏をファシリテータとしてお招きし議論を進めた。

まず初めに参加者の自己紹介と、なぜこのセッションを選んだのかをお話頂いた。具体的なビジョンを持ち積極的に行動している人や将来への不安から回避的に海外に目を向ける人など様々な理由があったが、共通して言えることは各位海外経験を持ち合わせておりその経験を上げようとしていることであった。次に、ファシリテータのアレックス氏の体験談をお話頂いた。特に、海外での就職や日本国内でも外資系企業の就職の考え方は、日本の終身雇用とは違い、実力主義であることをご説明頂き、自分の実力を発揮できよう就職先を換えられるというメリットはあるものの、常に実力を発揮できる場所を探さなければならないというデメリットを認識できた。その上で参加者各位の、考え方の明確化・具体的な行動指針を導き出すために、5W1H という形式でディスカッションを行った。

- ・WHAT： 海外で研究の仕事やマネジメントなどをしたという意見が出された。
- ・WHY： 視野を広げたい、違う文化を知りたい、海外から日本をみたい、語学力を高めたいなどの目的があり、また遊びという目的もあった。
- ・WHEN： 皆さんとも明確な時期は持っていなかったが、全員が頃合を見計らい決定したいと考えた。
- ・WHERE： 英語圏、ヨーロッパ、アメリカ、アジアの希望地があった。
- ・HOW： 先ず海外の大学に入学した後、海外で就職活動をするという方法も考えられた。

また、上記ディスカッションの中で「家族をどうするのか?」「生涯海外で生活するのか?」「日本人のアイデンティティは?」など、広範囲に議論を展開し、参加者がこれまであま

り意識していない部分に対しても考慮が必要であるとの意見が出された。

最後に、グループA参加者全員でディスカッション内容をプレゼンテーションし、「母国以外の就職」を実現するために必要なスキル・心構えをワークショップ参加者に対して報告を実施した。

3.2. グループB

グループBでは「楽しく働くことのできる仕事とは?」というテーマで、株式会社日立製作所の加藤裕子氏を迎えてディスカッションを行った。まず、第一段階として「楽しく働くとは?」ということを各自ポストイットに書きこみ並べ、それに、ついてグルーピングを行った。挙げた意見のグルーピングとしては「人に役に立つ仕事・社会貢献」、「自分の興味関心」、「満足感」が挙げられた。

次に「(仕事とか関係なく)人生を振り返って楽しかったこと」について話し合った。その中で、「努力が報われたとき」、「好きな事をしているとき」、「人から『すごい』と言われたとき」などの意見が出た。

結論は出なかったが90分の話し合いのまとめとして、「人の役に立ちたい」、「興味があること」「達成感」「目標がある」「経験を活かす」仕事楽しく働くことのできる仕事という意見が多かった。



各グループでのディスカッション

報告

3.3. グループC

グループCでは、「転職はしたほうがいい？しないほうがいい？するとしたらどんな会社に？何年後に？」というテーマについて、大きく2段階に分けて議論した。

まず第1段階目として”仕事”とは何かについて皆で意見を出し合い、その内容をグルーピングした。”仕事”について「金」「楽しむこと」「社会貢献」「企業利益」「仲間」「お客様の笑顔」などの意見が上がった。これらをグルーピングした結果、「自分」「会社」「コミュニケーション（チーム）」「お客様」という4つのグループに分けられた。最終的に、一言で”仕事”とは「自分、会社、お客様のためにチーム一丸となること」とした。

次に2段階目として、先に結論づけた”仕事”と照らし合わせて「どういう時に転職したほうがいいか？」について同様の事を行った。転職したほうがいいという状況の一例として、「会社が潰れそうな時」「会社の仲間に迷惑を掛けている時」「自分が正当な評価を受けておらず、ストレスを抱えている時」など、逆に転職しないほうがいい一例として、「成果が出せず周りに迷惑をかけている時」などがそれぞれ挙げられた。これらを先に結論づけた”仕事”の4つのグループに沿ってまとめると、「お客様」「自分」に関係するものは転職の要因とならず、「チーム」「会社」に関係するものは転職の要因となるといった結論になった。



活発な議論が行われた

3.4. グループD

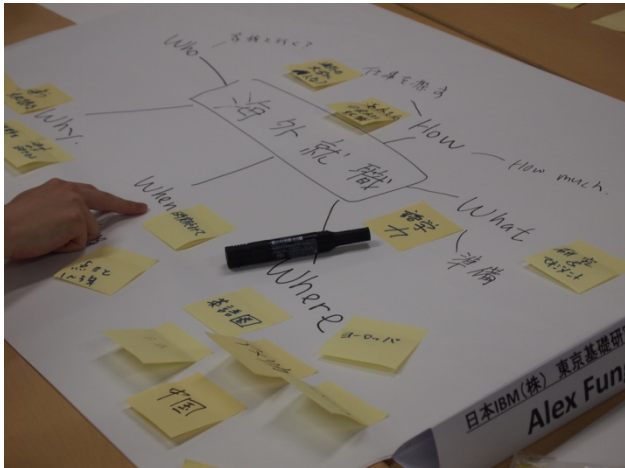
グループDでは「会社でしたいこと、できること、会社に求められること」というテーマでディスカッションを行った。大まかな道筋として、会社でしたいこと・できること・会社に求められていることをそれぞれ3つの円で表現し、その3者の重なりが最大になったときが自分にとって最も幸せな状態だと考え議論を進めた。時間の関係上、議論を深めることが難しく、会社に求められることを先に考えたが、そこが曖昧になってしまったため他の領域にも曖昧さが派生し、3者の重なりが希薄になってしまった。しかし、この3つの円は互いに相反するというのではなく、できることの領域を拡大して行き会社に求められることの領域に達することで自己啓発ができた。したいことと会社で求められることの位置関係を確認することで会社選びの参考にしたりという使い方ができることが分かった。

3.5. グループE

グループEでは、「システムエンジニアに必要なこと」というテーマについて議論を行った。まず、システムエンジニアのイメージについて、グループで意見を出し合った。そして、それらの意見のグルーピングを行った。

グルーピングにより、「コミュニケーション能力」、「専門知識」、「やりがい」、「マイナス面」の4つの意見にまとめられた。必要なスキルとしては、専門知識は当然のことながら、加えて、表現力や発想力などのコミュニケーション能力が求められるだろうという結論を得た。また、システムエンジニアは関わる方面によって、必要なコミュニケーション能力が異なり、話す相手が、顧客なのか、プログラマーかによってうまくコミュニケーションを切り替えることも重要であるという意見もあった。

「やりがい」、「マイナス面」に関しては、マイナス面の意見が多数あげられたが、それらが結局やりがいにつながるであろうという結論に収束していった。



将来のキャリアについて考える良い機会に

3.6. グループF

グループFでは、海外で活躍するために必要な事についてディスカッションを行った。最初に、海外で活躍に対する定義を皆で確認したところ、「外国人を含む会議等で、話の流れを自由にコントロールできる」や「国籍の隔たり無く、自由にやりあえる」などの個人の能力に関する事と、「日本の製品、サービスが海外で利用される」、「海外からお金を持って来られる」などの企業や団体としての考え方と大きく分けて2つに分かれた。故に我々は「個人として活躍する」事と、「日本人が活躍すること」の2つについてそれぞれ議論した。以下に議論の要約を記す。

個人として海外で活躍するためには、もちろん語学力が求められるだろう。日本人の英語力は先進国で最下位であり、英語でのコミュニケーションは極めて苦手とする者が多い。しかしこれは単に単語力や文法などの語学力が足りないので

はなく、文化を理解していない事によるものと言える。「他人を気遣う」ばかりの日本人にとって、「主張する」そして「他人を尊重する」という海外の文化を理解する事は難しい。さらに、その難しさ故に海外に目を向けず、「海外=危険」のような一面視などから、海外人気低下するという現状も挙げられる。個人が海外で活躍する為には、まず海外に行き、海外の国々の文化を理解することが大事だろう。そして改めて世界における日本を認識することによって、他国との競争心や自国の愛国心、そして日本人としての特徴を得る事が重要であるだろうこれらの能力を獲得する為には、日本全体としてどのような事が問題となり、何が必要とされているか、それが「日本人みんなが活躍する」ための2つ目のディスカ

ッションである。それぞれ様々な見解があるが、1つに「日本が平和だから」という意見が挙げた。日本は戦後の60年間、日本経済とともに多くの企業は順調に成長し、海外の企業との競争をあまり経験していない。経済が活発な時は、企業は真面目にビジネスを行っていただければそれでよい。しかし経済が十分に潤った今、日本だけでビジネスをすることは難しくなってきた。しかし海外の企業と戦い、ビジネスを奪ってくる為には、日本人には競争心が欠けていると言える。例えば日本の大学生はバイトやサークル活動に明け暮れている中で、米国スタンフォード大学の学生は世界で活躍する為に自己の能力を高める事に夢中だろう。これらの状況を改善する為には、日本国または日本の大学に変革が必要だと考える。例えば留学を義務化などどうだろうか。日本の学生を海外に派遣し、海外のライバルを意識させることによって競争心が生まれてくるのではないだろうか。

以上のように、今回のディスカッションにて導かれた結論として、日本人が海外で活躍する為には、個人が現状に危機感を感じ、海外の文化を知るように努める事、また国、学校、企業などの団体はオープンな精神を持ち、海外に対して心を開いて、派遣や留学等を積極的に行うことが求められる。これらの対策により、日本人が海外に対する意識と競争心を持って、海外で活躍できると考える。



成果報告の様子

報告

3.7. グループG

Gグループでは、学生時代の研究活動と就職後の研究活動の違いについて議論した。

このテーマについて話した人数は6人である - 内訳は学部生3人、大学院生2人、ファシリテータ。以下の5つの論点について意見を交わした。

一つ目が生活スタイルである。学生においては時間が縛られている研究室は少ないのに対して、企業においては明確な時間管理を要する。二つ目がノルマである。大学生における研究はある特定の目標があるが、ある程度失敗を容認できる環境にある研究室が多いと思われる。それに対して企業においては利益が直接的に関係している場合が多いので、意識の仕方が違うようにも思われる。三つ目が何のために研究かである。学生にとっての大学の研究は通常3年程度で完結する内容である場合が多く、長きにわたって同じ研究に従事するスタイルではない。四つ目ができること/できないことである。学生が研究するにあたってやっつけられないことは基本的にはないものと考えられる。それは学生の立場と企業で働く立場の違いに起因すると考えた。学生は大学にお金を払って通い学ぶ立場にあるが、企業に勤める者は生産性を求められ、それに対する給与が発生する。五つ目が世の中との関係である。何か世の中で大きな事件があったとして、それが原因で研究室の教授が変わることは考えにくい。しかし企業においては、それが行われる場合が多々ある。

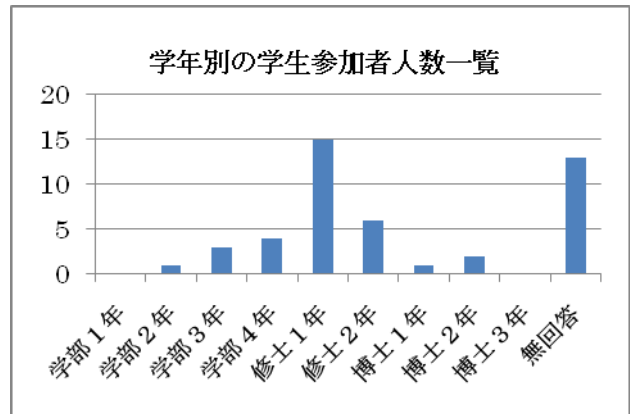
以上の点から、学生と企業の研究の一番違いはチームワークにあると考えられる。学生が卒業するための条件が、その過程がどうであれ、個人の成果で帰結するが、企業での研究はチームがある特定の目標に向かうことにあるということである。それに伴って時間や自由もある程度束縛されてしまう。しかしチームとして長期的な研究が達成された時にこの上ない喜びを感じるのであろう我々は考えた。

4. 参加者アンケート

ワークショップ終了後に参加者にはアンケートに回答してもらった。ここでは、その結果について述べていく。

4.1. 参加者について

アンケートに回答した44名の内訳は学生42名、一般2名であった。42名の学生の参加者の学年の構成を下の図に記す。

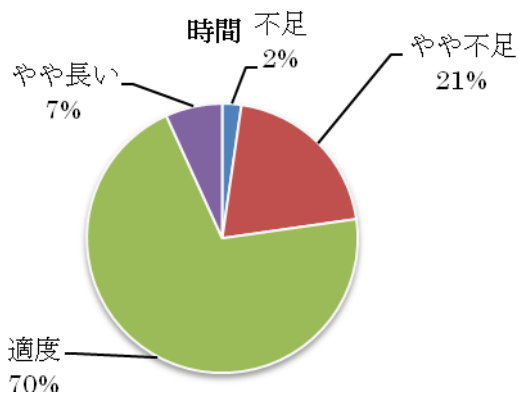
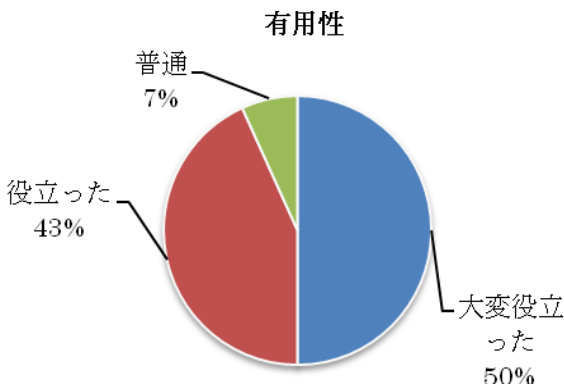
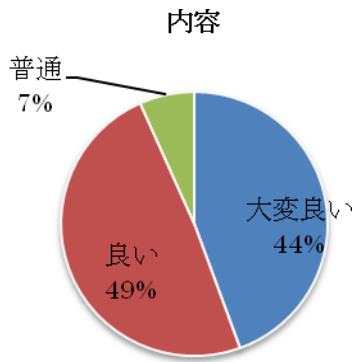


4.2. ワークショップの企画に対する評価

本ワークショップの企画について、内容や有用性、時間の長さについてそれぞれ下記の5段階で評価してもらい、その理由を自由記述形式で求めた。

- (1)内容:大変よい, よい, 普通, あまりよくない, よくない
- (2)有用性:大変役に立った, 役に立った, 普通, あまり役に立たなかった, 役に立たなかった
- (3)時間の長さ:不足, やや不足, 適度, やや長い, 長い

次ページの図に示したように、本ワークショップの企画についての評価は、内容、有用性ともに良い評価が得られた。具体的な意見としては、「ラフな話し合いができて楽しかった」「他大学や社会人の方と話す機会は貴重であった」「人の意見を聞くことで自分の考えをブラッシュアップできた」「将来必要なスキルや考えが明確になった」などがあり、多くの方の意識の向上に貢献できたと考えられる。特に、「ワークショップの中で完結させずに外部に発信・提言できないか」といった意見があり、学生と社会人の交流の場として非常に有益であることがわかる。また、時間の長さについても「適度」の意見が大多数であったことから本ワークショップの内容が充実していたということがうかがえる。



4.3. 今後の企画

今後の企画について、参加するとしたらどのような企画を期待するか、興味のある分野は何かをそれぞれ複数回答可の選択式で訊ねた。選択肢は、以下の通りである。

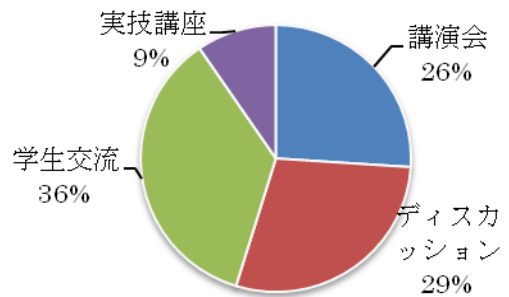
(1) 今後期待する企画：

- ・講演会(講演者が企業研究者, アカデミック研究者),
- ・ディスカッション(希望のテーマを自由記述),
- ・学生同士の交流,
- ・講座(統計, プレゼンテーション, その他を自由記述),
- ・その他(自由記述)

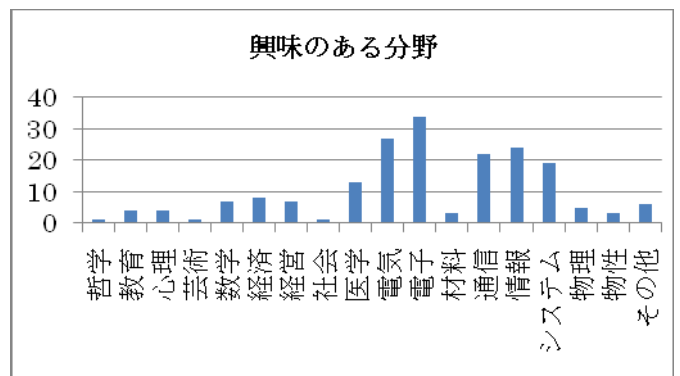
(2) 興味のある分野：哲学, 教育, 心理, 芸術, 数学, 経済, 経営, 社会, 医学, 電気, 電子, 材料, 通信, 情報, システム, 物理, 物性, その他,

下の図に示したように、今後期待されている企画としては、講演会を中心に、学生同士のインフォーマルな交流やディスカッションなど体験型のものが期待されていることがわかる。また、講演会の講演者は企業の研究者の方を希望する人が多かった。興味のある分野では情報を始め工学系が多かったが、医学や経済に興味をもつ人も少なからずいた。

次に期待する企画



興味のある分野



報告

5. 今後の展望

五回目となる本ワークショップはこれまでと同様、良い評価を受けており、今後も実施し続けていくことによって多くの人のキャリア構築に役立てていきたいと考えている。次回は、2011年10月頃に第6回を予定している。

謝辞

本企画において、ファシリテータとしてご出席いただいた Alexさん、加藤さん、近藤さん、鈴木さん、森山さん、山下さん、若木さん、山田さん、へ深く感謝を申し上げます。また当日は、各グループにおいてサポート係を務めていただいた、劉さん、木村(拓)さん、山本さん、大津さん、木村(洋)さん、二ツ木さん、菊田さん、山田さんの9名の学生にも、感謝を申し上げます。